『随想』

昔のくらしの中で

桧垣七郎
（会員・佐伯市下久部岡ノ谷）

㈠　ナニ言葉

言語学者ならいざ知らず、昔の一般庶民の暮らしの中では、多くの言葉を使わなくても、結構用事は足せていたものである。

特に田舎ではその傾向が強く、次のような会話が実際に行われていたのである。

夫「おかあよい、もうナニがナニしてナンじゃあきい、ナニをナニしちょかにゃナンじゃあがのう」

妻「そうじゃあなあ」

他人が聞いてもサッパリわからないだろうが、これで結構夫の云わんとすることは妻によく通じているらしい。

つまり、その時の暮らしの状態、天気の状況、その他農作業の段階の状況などから察しがつくのであろう。

夫婦の仲は、かくの如くありたいものである。

さてこそ、どこかの国の元総理大臣も、閣僚や議員や記者、また国民大衆とも意思相通ずると信じていたものか、この言葉を愛用していたようである。

この、すべてを云い表わすことのできる「ナニ」という古典的？な言葉を聞くことも、この頃では少なくなった。

世の中が文明化し、テンポを速めていく時代の激流の中に、この言葉もやがて消えていくのだろうか。

ふるさとの中の、なつかしいものが失われて行くような、何とも名残り惜しい気がする。

㈡　意思表示

昔の農家の生活は、現金収入も乏しく、総領息子は農業を受け継ぎ、妻を娶って一家の財政をまかされるまでは、親がかり（親に依存）でいろいろな不自由をしのばねばならないことが多かった。

そんな中でも、息子は年ごろになれば妻も欲しくなり、財政的な実権も握りたくなる。

しかし、親からみれば幾つになっても子供は子供であり、ついつい息子の気持もわからないことが多い。
息子としても、黙っていてはいつになったら妻をもらうことができるかわからないので、親に対して知恵をしぼって意思表示をしなければならないことになる。

①広袖

毛布や羽ブトン、ベッドなど近代的な寝具などあるわけもなかった昔のくらしの中の寝具といえば、ゴツゴツの堅い敷ブトンに「夜着（よぎ）」または「広袖」と呼ばれる、肩を包みこみ、足先までスッポリかくれてしまう長い大型の綿入りの丹前と、その上に重い掛けブトンを着て寝ていたものである。

フトンなどの中の綿は、何回も打ちなおしたもので、それを包む布も、多くは手織りの粗末な紺染めの木綿布であり、総じてフトンは重いものであった。

――母親が夜遅くまで定額料金灯（20W？）の暗い灯の下で、つくろいものなどの夜なべをしていると、先に寝ていた息子が小便に起きたらしく、長い夜着（広袖）を引きずって母親の前を通りかかる。

母「今ごろどこに行くんか」
息子「小便ひりじゃ」
母「小便ひりに行くにい夜着うひこじって(引きずって) 行くもんがあるか。馬鹿が」
息子「ほいたて（でも）寝床で待っちくれちょるもんが居らんきい寒みいわい」
母「………」（ハハア、倅も嫁が欲しいのじゃな）

②飯、汁、茶、こんこ

昔の家庭は家族の人数も多く、食事時には主婦である母親はみんなの給仕などで忙しい。
そんな中で、年ごろの総領息子が大きな声で「メシ、シル、チャ、コンコ（漬物）」と叫ぶ。
つまり、飯とお汁とお茶と漬物を同時に呉れと要求するわけである。
驚いた母親が「ちったあ（少しは）もぬう考えて云え。こんしょわしい（忙しい）にい何もかも一ぺんに（一度に）呉りいち云うても、どうしてでくるか」と叱る。
息子「ほんなら（それなら）一ぺんにでくるようにして呉りい」

母「なに?!」母親もやっと「ああそうか」と息子の云いたいことに気がついたようである。

——このように「広袖作戦」や「飯、汁、茶、こんこ作戦」によって、父親や母親も否応なく息子の年ごろや願望を思い知らされて

——母「お父ったん、もう倅にも嫁をもろうてやらにゃいけめえなあ」

父「そうよのう」ということになる。

何とも素朴な、素直で明るく、控え目でユーモアのある暖かい親子関係や家族の雰囲気を思わせるものがある。

これも心の健康な「古きよき時代」であったと云うべきであろうか。

◇　◇　◇

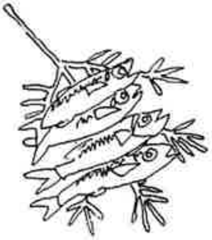
なお、この①②の話は、決して作り話ではなく、実際にあった話として語り継がれてきたものである。

訂正とお詫び

一六七号P15終わりから六行目より

㈤長松山洞明禅寺

正しくは燈明寺と書く。と書いてありますが

㈤長松山燈明禅寺

今は洞明寺という。の誤りでした。訂正してお詫びします。